記憶を綴る人

平岡けいこ

何度目かの台風が行き過ぎた午後
街は徐々に速度を上げ疾走している
滑り込んでくる列車
人ひとヒトの群れ
帰宅ラッシュの大阪駅
生きることは時に残酷でさえある
今日を生きる人たち
学生、会社員、主婦それぞれの役割を担って
子供、成人、男、女さまざまな場所で点在する命の灯
今日を精一杯生きても報われない
何でもない一日が引いてゆく夕刻
沢山の足が同じ場所を目指して群れを成す
その道は光に満ちている
音楽家（ミュージシャン）になりたい
こんなにも多くの人に届く詞を紡げるのなら
ホールを命の灯が埋め尽くす
体温が熱気に変わる
音が身体を抜けてゆく
動き出す無数の灯　輝く無数の命
こんなにも人が息吹いていることの美しさ
こんなにも人が笑っていることの奇跡
どうしようもない毎日の同じ時間同じ場所を共有する
一つの記憶
不穏な世界は問題なく動いてゆく

けれどきみがいなければこの景気は
すこし変わっていただろう
わずかな欠損や欠落でも
この一瞬は訪れない掴めない体感できない
だから音楽家は声を枯らして唄う
この一瞬の輝きを
音楽家は激しく打ち鳴らす
命の鼓動を高らかに響かせ
きみが　きみが　きみが
きみがいてくれて
良かったと
生きることに纏わるさまざまな憂鬱と歓び
わたしは綴る
音楽家にはなれない
こんなに多くの人がまた元の場所に戻ったあとの
足跡の軌跡　解体される舞台セット
ほんのちいさなため息とふと口ずさむ
幸せな記憶の欠片

２０１３年10月17日大阪城ホールにて